

せだかむい

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第四十二号（一日発行）
平成五年三月一日

北海の 古平風土物語 (七)

鯨 場 夜空を焦がす浜町の大火

高岡 橋 源 五口

この春は鯨が大豊漁だった。
旧四月八日、（新・五月八日）
湊仏（お寺に行つて甘茶をもら
う日）の日のこと。南風が吹く
暖かい日が続く。なやば。（身
欠き鯨を作るために鯨を掛けて
干す場所）の身欠きや数の子、
鯨しめ粕などの乾きも良く、漁
場の親方たちは、若い衆の切り
上げが早くなるというので喜ん
でいた。

× × × × ×

今春になって三か月ぶりに、
旅回りの活動写真が浜町の芝居
小屋（土谷座）で開演した。

※当時古平町は電灯が無かつ
たので、ガス灯を使っていた。
前日から町回りの呼び込みも
賑やかに、大小ののぼりが小屋
の回りにいっぱい立って、華
やかな初日であった。

鯨の漁は良し、天気も良し。
ぼた餅の入った重箱などを持つ
た客で芝居小屋は超満員（入場
者は約三、四百人）の大盛況で
あったという。

開演して間もない八時ころ、
突然、映写室のガス灯の過熱で
フィルムに火がつき燃え出した
のである。火に驚いた映写技師
が、燃えさかるフィルムを映写
室から超満員の客席にはおり投
げてしまった。もくもくと上る
る煙と、フィルムの燃え上がる
真つ赤な火に場内は騒然となり
消火に取りかかる間もなく、障
子に、壁に、畳に、天井ようと
乾ききった場内に火が広がっ
た。観客は総立ちとなり、あわ
てふためき逃げまどった。階下
のものは我先にと狭い入口に殺
到、押されて将棋倒しになるも

のが多く、二階の客は階段から
転がり落ちて重なり、逃げ場を
失つて二階の窓を破つて飛び降
りる者もいた。

やがて火の中から助け出され
た人もいたが、押し倒され、踏
みつけられ、飛び降りたりして
けがをした者も多かった。

この日、友だちといっしょに
行つていた兄が、家中で心配し
ていたところに、着物の両そで
を無くして、はだしで息せき切
つて無事帰つて来たのでまずひ
と安心であった。

芝居小屋の回りは、火事場の
騒ぎと、人をさがす人たちの叫

戦時中、美人の条件が
「新女性美創定第一回研
究会」というイカメシイ
名前の会合で討論、まと
められた。

☆ ☆ ☆

① 顔や姿の美しさは、
飾らぬ自然の美しさか
ら

② 清く明るく朗らかに

③ 顔色つやつや日焼け
の自慢

④ 姿勢正しく、背骨は
まっすぐ

戦時型美人十則

び声で大騒ぎであった。

しかしし事件は、その後起こ
た。中で燃え出した火は、やが
て大きな屋根を突き破つて火を
吹き上げたのである。風に乗つ
て火の粉は火の玉となって飛ん
で行き、あちこちの屋根に火が
ついて燃え出し、火は町中に広
がった。

当時一般の家は、柱ぶき、板
壁で、中にはかやぶきの小屋も
かなりあった。屋根に瓦やトタ
ンを張つたり、塗り壁の家など
は、漁場の親方か大きな海産商
商店、酒造店ぐらゐであった。
（筆者は小樽市オタモイ在住）

⑤ 大きな腰骨頼もしい

⑥ 姿勢は正しく、さつ
さと歩む

⑦ 働けいそいそ疲れを
知らず

⑧ 食べてたつぷり、ふ
とれよのびよ

⑨ 言動優しく（女性の
男性化を防ぐ）

⑩ 眠れぐつすり夢見ず
に

新時代の美人の条件と
して、昭和十六年一月二
十日発表された。

有悠無憂

ゆとりあればうれいなし
こんな好きな言葉もあるが、残念なが私にはゆとりもなければ、心配事がないわけでもないが、七十三、四年も生きてくれば、時には余生をどう生きていくかふと考えさせられる。

最近若い方が事故死したり、病死したり、人間諸行無情の保証は無い。それなら今、今日をどう生きていくのがいいのか、改めて考えさせられる。簡単に割り切ると、人とのか

故郷を想う福井幸平

かわり合いの中で生きる、あるいは生かされるものだ。好き嫌いは別の話だ。また、自然とのかかわりを持ちながら、春を夏を、秋を、冬を生きていかねばならない。否、生きるなんて不遜で、思ひ上がりかもしれない。やはり生かされながら生きているというのが正しいのかも、人様の心を大切に考える人間を

育てながら、己れも育てられていくのかもしれない。

この自然を大切にして子孫に残さねばならない。基本は山の木を切らない、育てる、水を大切にする、川も海もそれによってたくさんの生命を創り出す。

現在のところ、森林を国土の面積あたりで見ると、日本が国土の六十五%で世界一である。カナダでも国土の四十六%ぐらいという。

ゆうべ本陣の伊藤幸子さんのお通夜へ行つて、遺族のことなど目の当たりにして、特に二人の子どもさんを遺して逝かれた

ことが目に映り、寝つかれないままこんな気持ちになつて、なぜか筆が走つてしまった。遺児たちよ、悲しみを乗り越えてしっかり成長されることを願わずにはいられない。

二月十七日夜――

× × ×

春来るを

待たずに逝きし

月明かり

海の魔神伝説

1

婦女禁制の神威岬

自然の造形の巧みさと風光の美しさに魅せられてか、今は、夏の積丹を訪れる観光の車が引きも切らずに通り返ぎていく。

余市からの海岸道路沿いの風景には、「この先はどうなってるんだろう?」と、一歩でも足を踏み入れた人を誘ひ込むような魅力がある。

途中の海岸でたむろしている人たちは、「今日はひとまずこの辺で――」と、面白い長編小説の途中にしおりを挟んで、楽しみを次に残した人たちかもしれない。

観光客の行き着く先は『神威岬』が多い。岬から見る海は、夏は笑っているがいったん荒れると、まさにそれはたてがみを振り乱し牙をむいた海に一変する。

幾多の伝説とロマンに彩られた『神威岬』の、隠された史実について伝えたい。

江差追分の「――せめて歌棄、磯合まで」の一節は有名でよく知られている。

この哀調を帯びた文句も『神威岬女人禁制』によるものであり、この掟(おきて)がいかに厳しく、当時の人たちが、どれほど神威の海におそれと信仰を抱いていたかが察せられる。

北海道の西海岸を航海する人たちは、オフ岬、モツタ岬、

そしてこのカムイ岬を西蝦夷地の三險岬といっていたが、中でも神威岬は最大の難所として恐れられていた。

小舟に乗って岬を行き来するアイヌの人たちは、イナホ(木幣)や酒を捧げてお祈りをし、和人は礼帆といって帆を少し降ろし、酒などを供え、大声を出すことも戒め、ひたすら無事に通れることを神に祈った。

郷土の発展に情熱を燃やす

尾山清

国破れて山河あり

敗戦という思いがけない事態に直面して、もうろうとして眺めた山や川は、それはきれいでしかも悠然としていました。そして、静かに語りかけてくれました。

『今日戦いに破れても、新しい明日に生きる山や川があることを忘れるでない』と。

この恵まれた自然の中で、古平町の若人は推進同志会を心の拠り所として、また同志会員であることに誇りを持って若き血を燃やし続けました。

終戦後は、全国的に青年活動が活発でした。明日を担う若人がわが町を愛し、国を思うこの若き力が、日本の復興に大きく貢献したであろうことを信じて疑いません。

目取 俊に

不幸にも古平の大火は、町のすべてを焼き尽くしてしまいました。

この大火を契機に私は札幌に移住しました。

わが家は焼かれ、会の拠点を失ったからは、再び会の結集を呼びかける人もなく、古平推進同志会は自然消滅の道を辿らざるを得なかったようです。

敗戦の憂き目にもめげず、若い情熱によって成長をなし遂げ

た、古平推進同志会の志を後輩に引き継ぐことができなかったことが、いまさらのように残念なことだと思っております。

戦後の古平に新風を吹き込んだ、推進同志会の活動ぶりを六回にわたって伝えていただき、ありがとうございました。ご健康を祈りお礼に代えます。



北海道語

アイヌ語らしいが、実はニセモノの、和製アイヌ語もある。

男の子が女の子とけんかをした時に、女の子をばかにして使う言葉に「メツカイ（メツケ）」というのがあった。アイヌ語で男をオツカイということから、日本語のオ（男・雄）とメ（女・雌）を対立させて作ったもので、男らしくない男を「男メツケ！」などとも言った。

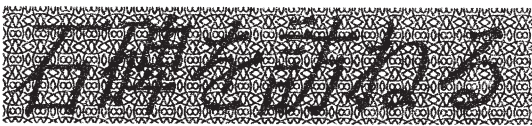
吉田一穂鎮魂歌碑

昭和四十一年八月二十四日
古平町鎮魂歌碑建設期成会

一穂は、戦時中はほとんど詩を作ることがなく、絵本の編集者として、生涯にわたった一度の会社勤めをしながら、この時期に多くの童話を作りました。

『鎮魂歌』は、はじめ『たましづめのうた』として発表されましたが、のちに題名が変更、漢字とかな混じりに改められました。

ある時、鎮魂歌を歌碑として、郷土の英霊が祀られている忠魂碑前に建てようという案が、古平小学校同窓会から出されました。これを受けて、鎮魂歌碑建設期成会が結成され、町民からの寄進によって完成されました。



二十世紀初めの《古平郡》

〈古平市街〉——つづき——

この地の建網業者の中には他の町村に漁場を持っている者もいるが、自分の資本だけで漁場を経営している者は六、七戸に過ぎない。あとは外からの仕込みを受けて経営し、甚だしいのは青田買いをしてようやく資本を得ている。ことに三十一年は不漁であったため、約束した鯨を引き渡すことが出来ないで大いに紛争し、漁具や家財を差し押さえられた者もいて混乱があった。それで三十二年には、青田売買によって資本を出す者がなく、資力の薄い者は着業がすこぶる困難だったという。

主な漁業家は、広谷源治、種田徳之丞の二人で、広谷は五か統、種田は三か統を経営している、それぞれ一か統で三百石以上の漁獲をあげている。

小漁民は、鯨漁のほか雑漁をしていて、一戸でだいたい六十円から百円の収入を得ている。

■曲辰 粟米

古平河畔の原野に、農業を専

業にするものが五、六十戸あつて、穀類、豆類、野菜類を栽培している。しかし地味がやせているため将来大きな発展は望めないようである。主な作物は、大豆・とうもろこし・馬鈴薯・そば・粟などで、その他大根・かぶなどである。穀類や豆類の多くは自家用で、野菜類は市街に供給しているほか、美国郡にも販売している。収穫量は、一

昭和十九年は、戦況もいよいよ敗色が濃くなり、深刻な食糧難の時代であったが、三月末になると、あきらめかけていた鯨が刺網にかかりはじめ、四月六日には、後志沿岸から北の日本海側一帯で鯨がとれた。

突然の鯨の群来に、浜でも戦争のような騒ぎになった。

【△7日はこんな日】 食糧難時代の救いの神 鯨大漁で学校も臨時休業 [昭和19年]

古いのや破れた網まで引つ張り出し、働ける者はみんなかり出された。この年の漁獲高は昭和になつてから五番目に多い一万二千石余りであった。

鯨はとれたもののその処理が大変だった。古平民学校では五年生以上が十日から二十五日まで、冲国民学校でも十日から

反歩（十^二）あたり大豆八斗（一斗^二十八^二）・一石^二百八十^二）・とうもろこし・そば・粟は一石から一石二斗ぐらいである。

農民は小作人（田畑を借りて耕作している人）が多く、小作料（田畑の借り賃）は、五十銭から一円五十銭で、平均は八十銭である。一戸の作付反別は一町歩から二町五反で、馬耕をしている者は少ない。当地で開墾地十二町歩を持っているのが最大の地主である。

■商 粟米
開拓時代は商店を開くといつても、多くは漁民の中で入港して来た北前船から荷物を受けてこれを委託販売する程度で、呉服、反物、小間物類は行商に頼っていた。

明治十年ころから呉服・荒物・小間物・雑貨商の店が相次いで開店し、商業が繁盛するようになった。主な商品は小樽や本州から仕入れ、これを美国や積丹の商店や行商人に卸し、郡内や余市郡沖村あたりまで小売りをしている。物価は、小樽に比べて一割から一割五分程高く、ことに荒物は二割以上も高い。

海産物は、入港の加賀、越中からの北前船に直接売り込んだり、または小樽商人の手を経てここから直接四日市・大阪などへ移出している。商人の中には一万円以上の資本を運用している者が五、六軒もある。

二十日まで臨時休業となり、浜での手伝いや家事に働いた。学校の鯨休みの記録は大正時代からあるが、最も長いのは二十一日間というのがある。

昔は、家事や子守りに子どもも大事な役割を果たしていた。